

防衛大学校本科第17期学生及び理工学研究科第10期学生
卒業式に於ける学校長式辞（昭和48年3月21日）

本日、防衛大学校本科第17期学生及び研究科第10期学生の卒業式を行うに当たりまして、田中内閣総理大臣^{注(1)}、増原防衛庁長官^{注(2)}をはじめ、内外から多数の来賓並びに父兄各位の御臨席をえましたことは、卒業生にはもとより、防衛大学校にとりまして、無上の光栄と存じます。ここに教職員、学生一同を代表いたしまして、来賓各位の御厚意と父兄の方々の御熱意に対して、心から感謝の意を表明したいと思います。

今日、卒業の栄をにないます本科の卒業生は、4月から陸・海・空各自衛隊の幹部候補生学校に進み、幹部自衛官となるための教育を受けます。また研究科の卒業生は、陸・海・空各自衛隊の部隊や防衛庁の機関において、それぞれ重要な任務につくことになっております。

このおめでたい日に当り、私は、まず卒業生諸君の門出を祝いたいと思います。そして本科並びに研究科の卒業生諸君が、今後、幹部自衛官として防衛の専門家としての道に勇往邁進されることを望みたいのであります。幹部自衛官は、高度の知識と技能とを必要とする専門職であります。防衛の学も術も、その研究と錬磨には限度というものはありません。およそすべての専門職は、一人前の能力を身につけるまでには、長い年月を必要といたします。しかし特に防衛の分野においては、世界各国とも国運を賭して新しい科学技術の開発に、また戦略構想の研究に当っておりますから、少しでも油断をすれば、たちまち防衛の専門家としては落伍してしまいます。もし万一、諸君が防衛の専門家として、世界の競争において落伍するようなことがあれば、単に諸君が、個人として失格するばかりではありません。日本国の安全が失われるおそれさえあります。このことは、幹部自衛官が単なる一つの専門職ではなく、国家の安全保障に対して、究極的に責任を負うところの特別の専門職であることを意味しています。

多数の主権国家が併存しております今日の国際社会においては、それぞれの国家が、



第3代学校長 猪木 正道

注(1) 田中角榮

注(2) 増原恵吉

それぞれの国家の主権の及ぶ範囲内の平和と安全に責任を負うことは、自国の独立を守るために必要不可欠であるばかりでなく、世界の平和を維持するただ一つの有効な方法でもあります。この意味において、幹部自衛官という専門職は、日本国の防衛のみならず、国際社会の平和と安全に対しても、崇高なる義務を負っているといわなければなりません。諸君が防衛の専門家として幹部自衛官の道にひたむきに進む際、常に幹部自衛官は、国家的にも、また全人类的にも、もっとも重大、かつ崇高な使命を負っていることを銘記して、これを誇りとしていただきたいのであります。

次に卒業生諸君が、防衛の専門家としての道に徹することの裏付けとして、防衛の専門家としての職能倫理をしっかりと身につけていただきたいのであります。諸君は、自衛隊の幹部として、将来、陸・海・空の各種の部隊を直接間接に運用する地位につくはずであります。防衛力は、これを物理的に見れば、当然、強大な破壊力を含んでいます。防衛力を直接間接、操作運用する立場にある自衛隊の幹部は、防衛の専門家としての高度の倫理的責任感に貫かれているのでなければ、その重大な使命を遂行することはできません。日本国が防衛大学校の卒業生諸君に期待するのは、防衛の専門家としての実力と、そしてこれを裏付ける高度の職能倫理とであると、私は確信いたします。

防衛大学校の本科並びに研究科の卒業生諸君が、このような全国民的、国家的な期待に応え、今後、ますますたえざる研鑽に努め、幹部自衛官としての十分なる実力をたくわえると同時に、その倫理的責任感をいよいよ深くされることを期待して、私の式辞といたします。